

## テモテへの手紙第二3章 「困難な時代の支え」

### 1A 来るべき困難 1-9

#### 1B 自分を愛する者たち 1-5

##### 1C 終わりの日 1

##### 2C 敬虔の力の否定 2-5

#### 2B 真理に逆らう者たち 6-9

### 2A 神の人の備え 10-17

#### 1B パウロの生き方 10-12

#### 2B 働きに有益な聖書 13-17

##### 1C 学んで確信したところ 13-15

##### 2C 神の靈感 16-17

## 本文

テモテへの手紙第二 3 章を開いてください。パウロは今、ローマの牢に閉じ込められていて、間もなく皇帝によって死刑判決が出る中にあります。しかし、彼は自分の終わりだけでなく、世の終わりのことも考えています。今の時代が終わりに近いことを、彼は、何度となく他の手紙でも話していました。それは、御子が世に来られたからです。この方が来られてよみがえられた今、かの世が到来することは間近であると知ったのです。主ご自身が、このことをお語りになりました。一度、このように世に来たけれども、父なる神のもとに帰ったら、そこで備えをしてから戻ってくると約束されました。私たちは、このように、今が終わりの日であり、主が戻って来られるのが間近であると信じて、生きて行くのです。

### 1A 来るべき困難 1-9

そして、今、テモテがエペソで置かれている状況にも、終わりの日が反映されていることを指摘します。教会の中に、真理に背く者たちがいるのです。

#### 1B 自分を愛する者たち 1-5

##### 1C 終わりの日 1

<sup>1</sup> 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。

「困難な時代」とあります。この困難とは、ギリシア語は、野獣の凶暴な姿や、荒れ狂う海の姿を連想させる言葉が使われています。聖書では、マタイ 8 章 28 節にある「狂暴」という言葉と同じです。ガリラヤ湖の向こう岸に、ガダラ人が住む地にイエスが来られましたが、そこでイエスに会いに出てきたのが、悪霊につかれたふたりの者です。墓からやって来ました。「彼らはひどく狂暴で、

だれもその道を通れないほどであった。」とあります。

終わりの日の幻が、ダニエルが見ました。「7:2-3 私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。」とあります。荒れ狂うところから獣が出て来ますが、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、そしてローマの姿。それから終わりの日の獣、反キリストの姿が出てきます。荒れ狂う海から出た、獐猛な獣です。そして、キリスト者を迫害する者たちの背後に、悪魔がいることを、使徒ペテロは、獅子として語りました。「I ペテ 5:8 身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」

このように、非常に暴力的な形で、私たちの信仰を圧迫してくるということです。

### 2C 敬虔の力の否定 2-5

<sup>2</sup> そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。

どのような形で困難になるかといいますと、「自分だけを愛」する、ということです。キリスト者の信仰は、もっぱら、神とキリストの愛に満たされることです。神がキリストにあって私たちを愛して下さり、その愛によって、私たちは自分を愛する愛から悔い改め、神の愛に満たされます。もはや、自分自身は無となり、死んだものとさえみなし、キリストが自分のうちに生きることを願い、生きます。神を愛して、隣人を愛する生活です。

そこに、自分だけを愛していくという、ものすごい勢いをもった考えが押し寄せています。今世紀に入ってから、とみに酷くなっています。それは、真理ではなく、自分の気持ちや思いがもっと大事だという考えです。一見、人の思いや感情が大事だという考えは尤もに聞こえます。確かに大事です。けれども、それを真理よりも大事にしたらどうでしょうか？だれも、一足す一は二であることを知っています。けれども、そう感じない人が、そうではないと言ったら、真理が真理でなくなるのでしょうか？違いますね。けれども、今は、その人が感じたことが真理だとなります。こういった考えを、相対主義と言います。あなたが真理だと思っているのが真理だと。

けれども、ここには非常に危険な罠があります。つまり、自分自身の内に真理があり、自分自身を絶対化するということです。自分の上に真理がありません。自分が思っていること、感じていることこそが正しいのです。だから、自分の意見と異なる人が現れると、その人が自分を憎んでいるとします。今、多様性という言葉がもてはやされています。けれども、多様性とは、絶対的な真理が無ければ成り立たないものです。どんなに異なっているとしても、私たちは一致している部分があるから、違いを受け入れるというのが多様性です。しかし、それぞれが、自分が真理だと持っているのです

から、相手を受け入れないし、深刻な対立が起こります。あるいは、それぞれが自分自身の中に引きこもり、孤立していくのです。こうやって、自我が膨張して、肥大化するのです。自分を制するものが、上に存在しないのです。神が上におられるのではなく、内側にいて、ついに自分自身が神だと思ってしまうのです。

こういった、自分だけへの愛が、困難さの第一に來ます。そして金銭を愛するということです。これは、必ずしも金銭を数多く持つことではありません。金銭の勘定のように、すべての物事を損得勘定で判断していくということがあります。これは深刻な問題です。例えば、ポルノは女性の身体を肉体の塊にしか見ていません。商品でしかありません。しかし、結婚相手の男性を見る時に今の女性には、自分に得になるかどうかを見定めようとします。もし自分の得にならなかったら、相手を取り替えても良いと考えるのです。グーグル検索で、「結婚のメリット・デメリット」で調べると、その話題がわんさか出ます。これは、相手を物質化し、物体にしか考えていません。愛という犠牲を何ら省みずに損得勘定をしているのは、商業主義に侵されているからです。

そして、「大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し」とありますね。流れが同じです。自分を愛して、金銭を愛して、次に、尊大なことを語ります。例えばテレビや SNS では、過激なことを語ればそれだけ、注目を浴びてもうけることができます。実情に全く合わないことを、大げさに話します。自分の身の程を知らずに、大きなことを語ります。これらは高ぶりなのです。

そして、「神を冒瀆」するとあります。すべてがつながっています。自分自身を愛するとは、神が神であることを認めないで、自分自身を神としています。金銭を愛する商業主義に陥り、大言壮語し、高ぶるのです。自分の上の存在である、神は、最もいてほしくない存在です。

ここで思い出してほしいのは、反キリストの存在です。終わりの日に困難な時代になるのですが、人々の自己愛の究極の姿が、反キリストです。「ダニ 11:36-38 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。彼は先祖の神々を心にかげず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかげない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。その代わりに彼は岩の神をあがめ、金、銀、宝石、宝物をもって、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。」

そして、「両親に従わず、恩知らずで、汚れた者」といっています。十戒で父母を敬えというのは、神を敬う戒めの次に出てきます。なぜなら、親は子にとって神の代理人だからです。親の權威を認め、従うことは神に従うことにつながります。そして、そこから出てくる恩がありますね。今の時代の問題は、何もかもが当たり前だと思っていることです。自分に与えられた恵みをないがしろにしていることです。感謝がありません。人が豊かになり、恵まれていると、それを当たり前だとおご

り高ぶります。そのようにして、汚れた者になります。心が汚れているのです。

<sup>3</sup>また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、

ここにあるのは、人を人と思わないという無慈悲な感情です。人に与えられている自然の感情、そこにある愛情が冷えている姿です。イエス様も、世の終わりのしるしで、「マタイ 24:10 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。」と言われました。その自然の感情、情け深さを知らないで、人と不必要な対立を産み出します。和解しないのです。共感力が著しく欠如しています。そのため、人をたやすく中傷します。それがいかに悪いことなのかが、自覚がないのです。

そして、自制ができません。自分の思ったこと感じたことが第一で、偶像になっていますし、自分の上に神がないので、自制がきかなくなっています。それで、善というものを求めるよりも、悪いことばかりに走ります。粗野なのです。

<sup>4</sup>人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快樂を愛する者になり、

人との関係を、いともたやすく切るようなことをしてしまいます。向こう見ずで、思い上がりです。

そして、神よりも快樂を愛する、ということですが、高ぶっている人は、自分の思っていることや感じていることを第一にするので、知識と道徳が切り離され、知者であるようにふるまっていますが、自分の肉の欲望に対してはそのまま放置します。それで次です。

<sup>5</sup>見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。

ここが、極めつけです。「見かけは敬虔」だということです。世の終わりには、困難な時代があり、それは自分だけを愛するという時代で、高ぶり、感情のままにふるまう姿がありますね。ところが、最大の困難は、こうしたことが敬虔を装って、やって来る、つまり教会の中に入り込んでくるということです。教会は、聖別された存在であるはずなのに、世の中で起こっていること、しかも世がますます悪に傾いている時に、その悪が入り込んでくることです。見かけは敬虔なので、人がだまされやすいのです。

知識を装っているのですが、そこに「敬虔の力」が否定されています。偽預言者について、イエス様は世の終わりに多く現れることを語られました。その偽預言者は、教えについて偽りを語るということもそうなのですが、正しいことを語っているようで、実が結ばれていないことを指摘しておられます。「マタ 7:16-20 あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結び

ます。良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです。」

牧者チャック・スミスは、良く話していました。「これは、神から与えられた教えだ、として、人々に伝えるのに情熱を傾ける時、その教えが、自分の生活でいかにキリストに似た者に役立っているかを見てもらいなさい」ということです。

そして、パウロは何と言っていますか？「こういう人たちを避けなさい。」であります。こういう人たちと戦いなさい、と言っていません。議論しなさいと言っていません。避けなさいと言っています。テモテは、まさにエペソにある教会で、こういった者たちがいたのです。そして、キリスト教会の世界で、このような者たちがいるのです。言い争いをするのではなく、避けるのです。求めるべきことが、他にあるからです。

## 2B 真理に逆らう者たち 6-9

<sup>6</sup> 彼らの中には、家々に入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者たちがいます。その女たちは様々な欲望に引き回されて罪に罪を重ね、<sup>7</sup> いつも学んでいるのに、いつになっても真理を知ることができません。

霊肉二元論の教えを説いていたのでしよう。知識を伝えるのですが、敬虔には至らない教えなのです。そこで、歪んだ形で自由が得られたと思込んだ女たちが、様々な欲望に引き回されて、罪から罪を重ねていたのでしよう。

そういった人たちは、皮肉なことに、学びには熱心なのです。けれども、どんなに学んでも、いつになっても真理を知ることがありません。知識を得ているからと言って真理に至っているとは限らないのです。真理はイエスのうちにあります。イエスの似姿に近づいていないのです。いろいろなことを学んでいるのに、この人は何も変わっていないじゃないの？と、周囲の人々が見て不思議になる時は、要注意です。

<sup>8</sup> たぶらかしている者たちは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。<sup>9</sup> しかし、彼らがこれ以上先に進むことはありません。彼らの愚かさは、あの二人の場合のように、すべての人にはっきり分かるからです。

ヤンネとヤンブレという二人の人物ですが、名前は旧約聖書に出てきません。けれども、モーセに逆らっているというところから、出エジプト記で、ファラオについていた呪法師のことであることが分かります。モーセとアロンは、イスラエルの神がおられることをファラオに示すために、彼の前で、

アロンの杖を蛇に変えました。ところが二人の呪法師が、同じように杖を蛇に変えました。そこでファラオの心はかたくなになりました。そして、モーセとアロンは、その杖を使って、今度はナイル川を血に変えました。ところが、この呪法師たちも同じことをして、パロの心はかたくなになりました。このように神の証しを打ち消して、モーセが語った神のことばを、無きものにしようとしたのです。

教会の中にいる者たちも同じように、同じようなことをして対抗して、真理に逆らわせるようなことをします。テモテが教えているのに、自分たちも似たようなことを教えて対抗します。しかし、テモテは聖霊によって教えているのに対して、相手の教えは悪霊によるものです。似て非なるものなのです。そうやって真理に逆らわせているのです。

## 2A 神の人の備え 10-17

ここまでが、人々をだます者たちの仕業を、パウロは語っていました。しかし、テモテは全く別のものを追い求めるように勧めます。私たちも、こうした困難な時代だけれども、全く別のものを追い求めるように勧められています。

## 1B パウロの生き方 10-12

<sup>10</sup>しかしあなたは、私の教え、生き方、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、

ここには、パウロとテモテの間にある、長年の付き合いが反映されています。テモテは、パウロがどんな苦しみの中にあっても、ともに福音宣教の働きの中にいました。そこでテモテが、パウロから個人的に学んだことが、しっかりとあります。

一つは、「私の教え」です。パウロは、異邦人も救う、信仰による救いの福音を宣べ伝えていました。それゆえ、ユダヤ人から迫害を受けました。それだけでなく、イエスを信じるのだけれども、ユダヤ教に改宗しなければ救われないとする、ユダヤ主義との戦いがありました。外からだけではなく、内からも葛藤がありました。ユダヤ主義者のように、迫害を受けたくなければ、割礼を受けなさいと異邦人に言いさえすればよかったのです。私たちにも、これさえ教えなければ、多くの人に受け入れられるのにと感じる教えはないですか？例えば、イエスの御名の身による救いです。また、神の正しさと聖さについて。地獄についてなど。でも、どれ一つ欠けても、福音が福音でなくなってしまう。このようにしてパウロは、恵みの福音についての教えを固持しました。それをテモテはずっと見ていたのです。

次に、「生き方」です。パウロがその教えの通りに生きていたかどうか、最も知っていたのは、主以外にはテモテでしょう。例えば、恵みの教えをしているので、敢えてみことばを教えている人々から権利があるのに、自分で生活費をまかなうために働きました。

私たち、カルバリーチャペルの牧者たちは、チャック・スミスの聖書講解をすべて聞いています。昔は、カセットテープで聞いていました。創世記から黙示録まで聴きます。そして、ことあるごとに彼の教えを聞きました。どれほど、世において荒波があっても、また教会においても教えの風が吹いても、その教えによって守られたと言って過言ではありません。しかし、それだけではないのです。カルバリーチャペル・コスタメサは、一時、一万人以上いる礼拝出席者数でした。けれども、彼は、まるで数十人の教会の牧師であるかのように、一人一人のことを気にして、祈る人でした。大きな企業の社長のような存在ではなく、一つの家族のように人々をみなしていました。個人的に付き合ってくるのです。

この彼の生き方が、彼から見倣った牧者たちの生き方に見えました。例えば、カルバリーチャペル・ホノルルの牧者、ビル・ストーンブレイカーさんが来日した時にも感じ、彼の教会の大きいですが、小さな教会を牧する者たちに普通に接してくださいました。

「計画」とあります、はっきりとした目的があって、それにしがたって計画してきたことです。主から、はっきりと異邦人に福音を宣べ伝えなさいと命じられました。彼は、第二次宣教旅行の時に、アジアの中だけでの宣教を考えていたのに、御霊が禁じました。そして夢で、マケドニア人が助けてくださいというのを見ました。それで、タルソスから船出して、マケドニアに向かいました。あらゆる人々に福音を伝えるという目的があり、それに従い動いている姿をテモテは、ずっと見てきました。

キリスト者の間でも、今していることが、はたしてキリストをさがめ、この方に従う計画なのか、疑わしくなる時がありますね。キリストではなく自分を求めていたり、今の世を愛していたりするのではないかとと思われることがあります。キリストを第一にして生きるということは、挑戦です。その挑戦に果敢に取り組んだのがパウロでした。

そして、「信仰、寛容、愛、忍耐に」とあります。これらはつながっています。信仰は、どんな苦しみや試練があっても、それでも神がそこにおられると信じることです。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」そして寛容は、忍耐と言い換えることができます。これは、福音に対して反対したり、理解が鈍い人がいるとします。それでも、忍耐して相手の存在を受け入れて、根気よく伝えるというような意味合いです。

そして、愛ですが、これは深いです。キリストにある神の愛が溢れ流れて、それで福音を語り、みことばを教えられます。彼は、同胞のユダヤ人についてこう言いました。「ロマ 9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」身代わりになってもよいとまで思うほどの、強烈な愛を彼はユダヤ人たちに抱いていました。しかし、彼らこそがパウロを激しく迫害していた者たちなのです。イ

エス様が、十字架に付けられている時に、ご自身を罵る者たちに抱かれた愛と同じですね。

そして、忍耐についてですが、先の寛容と違います。寛容と訳されているのは、たとえ反対していても、相手の存在を認めるという意味での忍耐です。こちらの忍耐は、困難があってもあきらめることなく、主に忠実に仕えるところの忍耐です。ところで、この四つはすべて、コリント第一 13 章の愛の章の定義の中に出てくるものです。愛と直結していますね。

<sup>11</sup> また、アンティオキア、イコニオン、リステラで私に降りかかった迫害や苦難に、よくついて来てくれました。私はそのような迫害に耐えました。そして、主はそのすべてから私を救い出してくださいました。

これは、パウロとバルナバが第一次宣教旅行に行った時のことです。覚えていますか、ピシディアのアンティオキアで、町の大勢の人たちが信じたのですが、ユダヤ人たちが激しく反対し、口汚くののしりました。イコニオンに移ったら、そこで異邦人とユダヤ人が彼を石打ちにしようと企てていました。それでリステラに移りました。そこで福音を語っていて、足なえの人に、「まっすぐに立ちなさい」と宣言したら、彼は飛び上がりました。すると、群衆がバルナバとパウロを神々に祭り上げようとしたので、彼らは衣を裂いて、叫んでやめさせました。すると、アンティオキアとイコニオンから来たユダヤ人たちが、なんと群衆たちを抱き込み、パウロを石打ちにしたのです。彼は死んだものと思って、彼らは町の外に引きずり出しました。そして、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって、リステラの町に入って行ったのです。驚くことですが、この時の激しい迫害と苦難のことを思い起こしています。

テモテは、リステラ出身です。第二次宣教旅行からパウロに同行しましたが、第一次宣教の時に、彼のことをずっと見ていたのでしょう。本当に死んだ者と思われたのに、起き上がるという救いも目の当たりにしたのかもしれませんが。主は真実な方で、それでも彼を救い出してくださいました。

<sup>12</sup> キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

パウロが、テモテに手紙を書いている中で、数多く出てくるのが「敬虔」です。先ほども、敬虔の力を否定している者たちがいると話していました。キリストにあって神を恐れ敬い、良いわざに富むことが敬虔ですが、そのように生きて行こうとすると迫害を受ける、というものです。

しばしば、迫害について、特に迫害がないのにそれを迫害と言ってしまう傾向があることについて、チャック・スミスはこう言います。「私たちは、風変わりなことのゆえに迫害を受ける、とは言わない。」と。イエス様は、山上の垂訓で、「義のために迫害されている者は幸いです。(マタイ 5:10)」と言われました。義のために迫害されるのであって、それ以外のことで反発を受けたり、反感を買

ったりしても、それは迫害ではないということです。

それを踏まえて、私が日本において、迫害をどのように捉えたらよいかをお分かちします。日本は、歴史的に迫害の国です。今、それはあまり感じないかもしれませんが。けれども、それはあまりにもキリスト者の人数が少なく、社会的影響が小さいからです。日本のキリスト教史において、世界のおいてもまれに見る、大迫害がありました。キリシタンに対する迫害です。

なぜなら、キリシタンの人数が増えて、キリシタン大名も多く現れました。当時の為政者としては、キリスト教を通して世界の植民地化をもくろんでいるポルトガルやスペインに対抗しなければいけないと思ったことでしょう。しかし、激烈な迫害をしたことは間違いないです。江戸時代は、キリシタンを排除するためだけに、今にも残る制度を幕府が造りました。寺請制度です。すべての住民が檀家によって仏教徒になりました。今も、生まれながらにして自分は仏教徒だと思っており、キリスト者になろうとすれば、その圧迫を強く感じるのはそのためです。

そして、明治維新になってから、隠れキリシタンが表に現れました。それで激しい弾圧を加えました。しかしそのことが欧米諸国に伝えられることになり、外圧で禁教令は取り下げられました。しかし、プロテスタントでもリバイバルが起こりました。大正リバイバルと、昭和リバイバルというのがあります。そこで、日本は第二次世界大戦で、国内の統制を引き締めるため、キリスト教会にも手を出し、教会の指導者が逮捕されました。

今は人数が少ないので、相手にしていないのだと思いますが、リバイバルが起き、例えばキリスト者が全人口の5%に増えたというような、大きなうねりが起こったら、何かのきっかけで反対運動が起こると思います。あるいは、日本の情勢が変わったら、反対されるでしょう。コロナ禍で、ほんの少しですが、謂れのない非難を、礼拝を献げている者たちが受けました。

基本、迫害はありません。しかし、問題があります。日本のキリスト者は、心のどこかで、角が立つことを恐れています。迫害が起こる前に、迫害が起こらないように前もって忖度して、キリストに与えられた良心に従わないのです。ユダヤ主義者が、割礼さえ受ければ迫害を受けないと知っていて、割礼を宣べ伝えたように、これをしなければ、あるいはこれだけをすれば迫害は免れると思っ、妥協の道を選ぶのです。そのために、信仰から離れて行く人々が多くいます。しかし、私たちは学びました。福音を恥としません。臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を受けました。

## 2B 働きに有益な聖書 13-17

そして、パウロは自分自身をテモテに模範として示して、次にテモテ自身が持っている霊的な財産を思い起こさせています。それは、彼が幼い時から親しんできた聖書です。

### 1C 学んで確信したところ 13-15

<sup>13</sup> 悪い者たちや詐欺師たちは、だましたり、だまされたりして、ますます悪に落ちて行きます。

良心を捨てて信仰の破船にあった者たちのことです。

<sup>14</sup> けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分がだれから学んだかを知っており、<sup>15a</sup> また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。

この手紙の冒頭に、パウロが書いていたことです。「1:5 私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。」幼い時に、すでに母と祖母から聖書を教えてもらっていました。それで、彼の信仰は偽りのないものでありました。

そこでパウロのテモテへの勧めは、「学んで確信したところにとどまっていなさい」というものです。学んで確信しているところに対して、違った教えが、反対論が入って来て、テモテが大きな苦勞をしていたということです。彼は、そこで恐れを感じて、みことばを教えて行く力がそがれて行ったように思われます。しかし、学んで確信したところに留まります。

私も、初めに教わって確信したところを、長い信仰生活をしていく中で、挑戦を受けることがあります。それは、信仰の確認をしていくうえでとても刺激的で、益になることもありますが、しかし、かえって信仰から遠ざけるような内容のものもあります。確かに、初めに教えられたことが正しいのだと帰っていくことができる居場所があることは、本当に幸いです。信仰の歩みの中で、教えの風と呼ばれるものが吹いてくることがあります。しっかりとキリストのうちに堅く立ってください。

<sup>15b</sup> 聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。

初めに学んで確信を得ていることが、果たして正しいのかどうか？を推し量るには、ここが物差しになると思います。つまり、その知識が、イエス・キリストに対する信仰を増し加えているのか？また、この方による救いに関わることなのか？ということです。神が、聖書において、ご自分の計画全体を啓示しておられます。その中心が、キリスト・イエスご自身であり、この方こそが救い主であるということです。黙示録の終わりが、教会に対して、主が「しかり、わたしはすぐに来る」というところで終わっているのです。教会が、主が来られることによって天に引き上げられる、そのことによって、今の悪い世から救い出されることで終わっているのです。

テモテは、自分が幼い時から親しんでいた聖書こそが、パウロの福音の要になっていることを、

もっと確信を持つ必要がありました。聖書だけで、信仰者の生活と実践に十分なのです。他の特別な教えは必要ないのです。あたかも、聖書だけでは足りないとして、新たな教えをしてこようとする者たちが、いつの時代もあります。それで、大きくそれて行くのです。

## 2C 神の靈感 16-17

<sup>16</sup> 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

午前礼拝では、聖書がすべて神の靈感によるものだということを学びました。書かれたことばは、神の息そのものであり、私たちを生かし、救います。

そしてパウロは、これがいかに、義の訓練のためになるかを教えています。2章2節で、「ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。」と命じられていました。聖書こそが、その知恵の宝庫であり、しっかり身に着けていくことが必要であることを教えています。

まず、「教え」に有益です。ここの教えは、教理とか教義とか言われているものに近い考えです。信仰についての教えです。そして、次に「戒め」です。教えを受けると、自分がどこか欠けているかが示されます。自分のどこが間違っているかが示されます。聖書は、自分を肯定してもらうための書物ではありません。自分のあり方を否むところの書物です。まず、間違いが指摘されるのです。ですから、聖書のまっすぐなメッセージを聞けば、それは痛いはずで、整体で、肩が凝っていれば、凝っている人ほど、もまれると痛いです。それと同じで、正しい教えは人の霊的に凝っている部分、堅くなっているところには痛みを生じさせるのです。そして、矯正です。これは正すことですね。過ちが明らかにされたら、次に正すことが必要です。そして義の訓練です。正された者は、いかにその義に留まっていられるか、訓練を受けます。

<sup>17</sup> 神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。

「神の人」というのは、誉れある呼び名です。アブラハムやダビデなど、神に用いられた器に使われている呼び名です。その人たちは、聖書があれば、すべての良い働きをするために整えられることができます。一部の良い働きではありません、すべての良い働きです。そして、少しだけでなく、十分に整えられることができます。

カルバリーチャペルでしばしば言われるのが、「聖書から教えるのではなく、聖書を教える」という言葉です。聖書のどこかの箇所を使って何かを教えるのではなく、聖書そのものが人々を変える、人々を救うことを知っているのが、聖書を教えます。聖書は、神のことばです。その御霊のいのちが働いています。神のことばを知り、聖霊によって変えられます。良い働きに整えられます。どうか、知識のための知識ではなく、良い働きのための整えとして学んでいってください。